

# 倉敷の信徒父子

——菓子商浅野義八と息子恵二——

竹 中 正 夫

## 倉敷の商人たち

倉敷は、徳川時代に幕府の天領であった。現在のアイビスクエアの正門を入った、右手に古井戸があるが、これは、倉敷におかれていた代官所にあつたものである。ここでは諸藩の金は通用しなかつた。幕府の直轄地としての保護をうけ、裁判所の所在地としての特権があつた。だから「倉敷もんとは喧嘩をするな」ということがいい伝えられていた。温暖な気候と豊かな地味に恵まれたこの地に、近隣の富豪たちは次第にやってきて、農商工業の中心地となつた。年貢の安かつたことも幸いした。物資の集散地として、土蔵をつくり、そこに物資を収納して荷積みし、船で大阪や関東地方に送つていた。倉敷という町の名称はここから由来するものといわれており、「関東御蔵入の米、此地にて津出しをなす、其蔵の敷地を以て倉敷と名付という説もあり」とも伝えられている。<sup>1)</sup>

明治二七年に発行された『小学岡山県誌』は、倉敷についてつぎのようにのべている。

撫川の西南に倉敷町あり、富豪多く、戸数一千七百、人口七千あり、潮川は、児島湾に通じ、山陽鉄道は、倉

敷駅を置けるが上に、電信の便あり、穀物、畳表、綿糸を輸出し、又紡績の工場ありて市況盛なり。<sup>(2)</sup>

明治二〇年、倉敷に紡績工場を設けることが発起され、その後鉄道が設けられ、にわかには倉敷が活況を呈してきた様子がうかがえる。明治以降の倉敷の町の発展に寄与した大原孫三郎は、石井十次の感化をうけ、明治三八年七月三十一日、倉敷で洗礼をうけた。当時は、倉敷にキリスト教の教会は設立されておらず、講義所が設けられていた時代であった。大原は、キリスト教の精神に触発され、私財を献げて石井十次の岡山孤児院の事業を支援するとともに、「倉敷を東洋のエルサレムとなす」ことに天与の使命を覚え、その理想の実現のために尽力した。<sup>(3)</sup>大原の周辺にあって、彼を助け協力した人びとのなかには、林源十郎（葉種商、一八六五—一九三三）木村和吉（町長、一八六一—一九二七）というような人びとがあったが、これらの人びとはみなキリスト教徒であり、倉敷基督教会の会員であった。

わが国の社会主義運動の先駆者の一人である山川均は林源十郎の妻浦の弟であった。彼は、その自伝のなかで、倉敷を小さなカナンとよび、近隣の有力者たちが倉敷に移住してきた事情についてつぎのようにのべている。

こうして倉敷村の開けた或る時期には、生活のムチで追い立てられた人や、いくらかの蓄財をいだいて一と旗あげようとする人、祖先の土地からはなれる決断と覇氣とをもった人たちが、あいついでこの小さなカナンをさして旅立ったものらしい。しかしこの村で旧家といわれたような家には、たいていは食いつめ者がハダカ一貫で流れこんだのではなくて、郷土で相当の資産をつくっていた家や、すでにこの地方に田地を持っていた家が移住して、有利な条件のもとにスタートしたものである。<sup>(4)</sup>

小カナンといひエルサレムといひ、いづれも聖書にあらわされた新天新地のシンボルである。倉敷の町の背景には、新しい町づくりを夢みた人びとの息吹きがあったことは興味深いことである。

倉敷にキリスト教の教会を結成しようとする機運が熟してきたのは、明治三九年のことであった。同年六月二二日付の倉敷仮教会設立承認願に署名捺印した人びとは左の二五名であった。

浅野義八、同 千代、板谷弥兵、板谷郁郎、板谷常三郎、同 米、同 節太郎、小野寿吉、大原孫三郎、大橋 広、大橋朝野、太田 兼、木村和吉、同 隆、同 達、木村官太郎、瀬尾宗二郎、高戸 猷、高戸八千歳、田中 愛、林源十郎、同 清、同 浦、同 下枝、松崎謙吉。

この中には、板谷家の人びとや、小野寿吉のように倉敷の南部の田之上地方の農民も含まれていた。また、二五名中一二名が女性であることも注目される。さらに、前記の大原、林、木村などの倉敷における有力な素封家とならんで、浅野義八夫妻や太田兼などの貧しい人びとが含まれていたことは見落してはならない事実である。そして、のちの倉敷教会の歴史を辿るならば、浅野夫妻や太田兼の素朴な、しかし祈りを基盤にした敬虔な信仰は、倉敷教会の精神的支柱となっていたことを知る事が出来る。本稿においては、浅野義八に焦点をしぼり、その次男恵二の生涯を辿り、時代の変遷の中であって、受け継がれた信仰の系譜のあとを辿ってみたいと思う。

### 浅野義八の生いたちと入信

倉敷教会の設立にあたって最先きに署名しているのが浅野義八（一八五五—一九二四）である。彼は一八五五（安政五）年九月八日、倉敷の船倉で生れた。父は定右衛門、母はたか子といった。四歳と五歳のとき両親を失い、近親の八木家に引きとられて成長した。八木は菓子舗を営んでいたもので、若いころから菓子製造業を見習い、刻苦勉励し、独立して菓子店を町に開くようになった。店の名は「柳屋菓子店」といった。特別上等の菓子をつくるのではなく、

日用の駄菓子を作ったり、パンを焼いたりしていた。菓子を製造すると、店の方は夫人に任せ、自分は菓子箱を重ねて天秤棒にかついで近郷を回った。「柳屋の小父さん」という通称でよばれ、子供たちには待ちこがれられていた。明治一五（一八八二）年八月二日、若松千代と結婚した。千代の父は若松百介といい、母は茂子といい、倉敷の川西町に住んでいた。

倉敷で定住して伝道にあたった最初の人は川越義雄であった。彼は、同志社で神学を学び、明治一三年一〇月二九日倉敷に赴任した。浅野義八は、川越の伝道を通じて聖書の講義をきき啓発された。川越伝道師が明治一六年二月神戸に転任したあと、この地方の伝道に当ったのは亀山昇であった。彼は熊本バンドの一員であり、明治一六年、同志社在学中に夏期伝道師として倉敷で働き、明治一七年、同志社を卒業して天城に定住し、倉敷に水・木・金の三日間働き、田の上には木曜夜に赴いて伝道に励んだ。浅野義八は、明治一八年四月五日、天城教会において亀山昇から洗礼を受け、千代は翌一九一九年一月一七日、天城教会でジョン・ギュリックから受洗した。

## 信 仰 と 商 売

倉敷の町には、素封家や可成りの金持たちが多かった。毎年正月になると家々の前にその年の商売繁昌をねがって門毎に千両箱を沢山並べるならわしがあった。ハッピを着て鉢巻きをした男がやって来て威勢よく千両箱をおいて廻る風習であった。浅野義八はそれを見て、

千両箱 富士の山ほど積んだとて

冥土のみやげに なりわすまい

という歌をつくり、一枚づつ手刷りでチラシを刷って日曜日に近隣の家々に配って歩いた。幼くして父母を亡くし、小さいときから苦勞をして育ったので、金の有難さもよく知っていたが、人生における不変不朽のものを求めてやまなかった。「朽ちない宝を天に積む」(マタイ 六ノ二〇)という聖書の教えに共鳴するものを覚えた。義八は生来一本気の性格の持主で、これは正しいと思つたらいい加減にすまずことなく、徹底してやりぬく性分であった。

明治初期のキリスト教は、ピューリタンの色彩が強く、きびしい倫理的な性格をもっていた。その中には、安息日の厳守、禁酒禁煙、聖書の精読、祈禱の励行、十分の一献金、一夫一婦制を守ることなどが強調されていた。毎朝、七人の子供たちと食卓を囲んで聖書を読み、祈りを共にした。讚美歌をうたいながら菓子焼き、天城から亀山伝道師が訪れてくると籠かまどの側で祈りを共にした。

当時はまだ倉敷に教会が設立されていなかったもので、天城まで約一里余の道のりを子供たちを連れて毎日曜日礼拝出席に徒歩で赴いた。菓子商にとっては、日曜日は大切な日であったが、「安息日のため本日休業」と貼り出して店を閉じて教会に赴くのを常としていた。

義八は金持の多い倉敷の貧しい商人であったので、僅かな金でも貯えて商売の資本とする必要があった。収入の十分の一を献げるといふ聖書の教え(民数記 一八ノ二四)によつた十分の一献金の実行には苦勞がいったが、つとめてこれを実行した。晩年の述懐に、「十分の一献金はつらかったが二十年、三十年過ぎてふりかえつて考えると実に献げた事によつてどれ程大きな恩恵をいただいたか知れぬ」と感謝していた。岡山の教友丹羽寛夫は、浅野が十分の一献金の実行を苦心し、あるとき岡山に出て、牧師をたずねて相談にいったことを伝えている。浅野は、「伝道と献金とは止める訳に行かぬ。ところで今は商売をして居ては、其れ等の事が出来ぬばかりでなく、生活其物が不可能になり

ます」と訴えた。牧師も答えあぐんで沈思していると、浅野の方から「先生もうよろしうございます。やはり私が間違ふていました。商売をやめませず、伝道も何も私の出来るだけ一生懸命にやります。どうもご迷惑な事を申しまして失礼いたしました。ではごめん蒙ります」といつて帰っていった、ということである。こうして、「死ぬまで菓子屋をやりながら伝道します」というのが浅野の生涯のモットーとなった。

## 祈りの人

浅野義八の信仰生活で多くの人々に感化を与えていることは、彼が祈りの人であったことである。祈禱会には病気のほかには欠かさず出席し、熱心に祈りを共にし、祈禱会が終つて雑談に入るとさっさと帰るのを常としていた。林源十郎(Ⅱ)は浅野について、こう回想している。

其当時(川越伝道師時代)浅野兄の私方にお出下さつて私の祖父と父を前にして懇々伝道を説かれ最後に祈をしてお帰になつた事は、兩人共其の御熱心に感激して居つたのです。

また、浅野義八は、毎月第一日曜日の早朝五時から早天祈禱会を鶴形山の阿知神社の背後で催し、冬には提灯をさげて欠かさず守っていたことが伝えられている。浅野たちが祈禱会に集つたところに三人の尻が乗るか乗らぬほどの弓型の石があった。いまでもそれは「祈りの石」といわれている。

明治三七年二月一九日の『石井十次日誌』には、「倉敷浅野義八来訪(所感) 毎日朝夕祈禱会を開いて居る云々の話をきき予は一の教訓を受けたり」、さらに、「今晚より着床前に夫婦共に聖書を読み一日の御恵みを感じて眠につくことを決心し且つ実行し始む 而して之の規則は死するまで継続すべしと覚悟す」と記されている。一信徒の浅

野義八の敬虔な祈りの生活の実体にふれて、「祈りの人」石井十次がいかに深い感銘を覚えたかを如実に物語る尊い記録である。

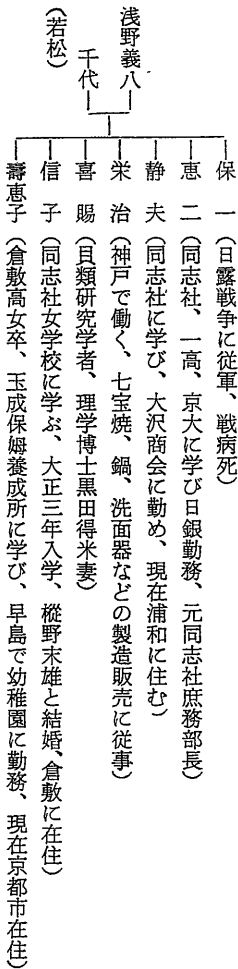
会堂が出来るまでは、集会は信者の家で行われていたが、浅野家でも家庭集會が開かれていた。『倉敷基督教会略史』をみると、明治二八年から三三年に至る間に、教勢が衰えて記事も少なくなっている。原文筆者の木村和吉は「この六年間筆者の怠慢と布教の衰頹及び当地信徒中、筆者の信仰零度以下」がその原因であるようにのべているが、同時にまた、この期間は全国的に反動期で、キリスト教に対して風あたりが強くなってきた時代であった。さきの欧化主義の時代は終り、憲法發布、教育勅語制定などを経て、日清戦争にかけて、国家主義が強くなり、排外思想が拡まってきた社会的状況があり、沈滞の原因を個人にのみ帰することの出来ない時代であった。こうした困難な状況において、倉敷において信仰のともしびを絶やすことなく守り伝えるのに寄与したのは、浅野義八であった。この間の事情を『倉敷基督教会略史』の筆者はこのようにのべている。

日清戦争前後から国民一般に排外思想が漲つて教界は手の出し様が無くなり従つて個人々々にも知らず知らずの内に萎縮し了つたと見るべきである。然るに茲に感謝すべき事は、すでにそれ迄の信仰生活に於て、靈肉両方面に、堪え切れぬ苦難を嘗め盡して、かすかな菓子店を生活の綱としながら、なほ迫害の中に安息日休業（閉戸厳行）を断行して、祈禱の熱火に燃えつゝ、信仰のたどりを続けられて来た浅野義八氏が、少しも動ぜず孤独の嘆に血涙をしぼりつゝ、確信の歩みを続けられた事を思ふと、全く胸つぶるゝ程に感謝に堪えぬ事である。

反動期の困難な状況の中で信仰を堅実に保った浅野義八の面影がよくあらわれている記述である。

## 家庭の人

義八と千代の間には、四男三女の子供たちがあつた。明治二〇年六月二日、長男保一は、天城教会においてケリ宣教師から幼児洗礼をうけている。彼は日露戦争に従軍し、戦病死をとげた。次男が本稿に扱う恵二で、三男静男は同志社に学び、大沢商会に勤め、現在は浦和に在住。四男栄治は、神戸で七宝焼を習得し、鍋、洗面器などの製造販売などに従事し、長女喜賜は、貝類研究者黒田得米に嫁し、次女信子は樺野末雄に嫁し、現在も倉敷に在住し、子供たちと教会生活に励んでいる。三女壽恵子は、倉敷高等女学校を卒業し、東京に出て、玉成保母養成所で学び、早島で幼稚園に勤務した。文才に秀いで『ひとりしづか』という作品がある。現在は京都に在住している。浅野義八は、奥野昌綱が岡山教会に来て講演をしたとき、彼に頼んで「吾恩恵爾足矣」〔わが恩恵なんちに足れり〕コリント第二二二ノ九という聖句を揮毫して貰いそれを表装して家かけ愛誦していた。神の恩恵をうけたものは、それぞれのところにおいてそれに応答する責任があると義八は考えていた。たとえ一生世にぬきん出た人物にならなかつたとしても、それぞれの場所で、世の中の片隅を照らす人になるように子供たちにさととしていた。<sup>10)</sup>





貧しい家庭であっただけに、子供たちの教育には並々ならぬ苦勞をし、それぞれが信仰の遺産を受けつぐ様に努力した。晩年になって、「一人は牧師にしておきたかった」と洩らしていたといわれている。<sup>11</sup> 大正一二年三月二五日に六六歳の生涯を終えた。三女壽恵子は一〇周年にあたって、つぎのようなうたを詠んで父を追想している。

梅の花手向けまつりて泣きたりし

十年のむかし思ひうかぶも

おもかげに見えくる父や老めがね

かけてみふみを読ませ給へる

七人の子等をはぐくみなりはひに

小夜ふくるまではげみたまへり

天雲のはるけき方にさかれども

父はいまなほ子等守りまさん

うつしゑのみ前に告げてうれしけれ

わがいたつきの日にまし癒ゆる

なお、千代は、夫をたすけ商売に励み、信仰生活を共に歩んだ。昭和二〇（一九四五）年、八〇歳の生涯を終えた。死ぬ数分前に辞世のうたを残した。

いまみぬに あまつみくにへの旅なれど

### 浅野恵二の生いたちと同志社普通学校時代

浅野恵二（一八八八—一九七八）は、明治二十一年一月二四日、義八と千代の次男として倉敷に生れた。家が貧しかったので、小学校には普通より遅れて、数え年で十歳のときに行くようになった。成績優秀で、倉敷精思高等小学校が一〇周年の記念会を催したとき、生徒を代表して挨拶をさせられたりした。

明治三六（一九〇三）年に、同志社普通学校に入学した。明治三〇年代の同志社は、徴兵猶予の特典を保つため、同志社綱領の変更を行って内外の批判をうけ、さらに文部省訓令第一二号（明治三十三年）が出て、宗教教育を行えば他法の法定の学校と区別されることになり、一九〇〇（明治三三）年からは、校名を同志社中学校から、同志社普通学校と改めて出発したところであった。一時は、九〇〇名近くいた生徒数も減少し、一九〇〇年には二六九名を数えるほどに減っていた。<sup>13)</sup> 浅野が入学したときは、一学年約三五—四〇名、全部で二〇〇名位であった。校舎は、彰栄館・公会堂（チャペル）・理科学館・神学館と一応赤レンガの建物が並んではいたが、その他の建物は粗末な木造のもので、物置小屋程度のものであった。それを半分に仕切り、一方が銃器庫となり、他方が教室で、境界の壁は荒壁といった状態であった。一時衰微した同志社の教育をよくしようと、熱心な教師たちが集まってきていた。社長は、片岡健吉が永眠し、下村孝太郎になり、普通学校長に丹羽清次郎、教頭は中瀬古六郎、教師には湯浅吉郎、三輪源造、波多野培根、今泉真幸、加藤延年など、校舎は粗末であったがすぐれた教師たちが熱心に教導し、生徒たちに多大な感化を与えた。

恵二の回顧談によると、当時の同志社普通学校の教育で、とりわけ印象に残っているのは、熱心にして有力な教師たちのいたことと、週五日制で、日曜日は精神的修養の日とし、土曜日は体を鍛練する日として、上級生が下級生をいくつかのグループに分けて、京都の近隣の山紫水明の地を散策に連れ出し、歴史を訪ね、自然を賞し、友情を深めあったことであつた。

片岡健吉が亡くなったとき(明治三十六年一〇月)、同志社では記念式典が行われ、そのとき、湯浅吉郎がつぎのような追悼歌を作つたことを、浅野恵二は記憶している。

きたかぜさむき 　あらぐまの

つめときすます 　あきなれば

もみぢをみても 　つきみても

しのおはきみが 　むかしかな

良師のなかで、恵二がとくに忘れられないのは、加藤延年のことであつた。彼は慶応二(一八六六)年、福岡県柳川に生れ、明治一六年柳川中学校を卒業し、同窓の小野英二郎、広津友信などが同志社で学び進境著しいのを見て、明治一八年京都に出て、同志社に学び、明治一九年六月二〇日、ラーネッド宣教師から洗礼を受けた。明治二三年六月同志社を卒業し、五年ほど熊本英学校の教師をつとめ、明治二八年四月から郷里の柳川中学校伝習館で教え、明治三二年四月から同志社で教鞭をとるようになった。担当は博物・歴史・地理であつた。該博な知識をもち、実物にあつて教育するようにつとめた。地理でアメリカ合衆国を教えるときには、地図を書き新島先生が赴いたところや同

志社の卒業生たちが学んだところを具体的に教えた。博物の標本を集めるのに苦心をし、淡路島から寄附者を与えられて漸く揃えたりしていた。地理のとき、当時の東京の一五区の名前を教えるにあたって、つぎのような詩をつくって生徒たちに暗誦させたりした。

神田ノカミハ

日本ノキヨ

シバノアサハ

アカノヨツウシ

コホンノシタ

深キトコロアサン

加藤延年は徳富蘆花を愛好し、生徒たちにも蘆花のものを推賞していた。生徒たちは彼に「貧乏エビス」というあだ名をつけた。時の同志社では給与もさして高くなかったと思うが、貧乏を意に介せず、いつも微笑ほほえみながら生徒たちの訓育にあたっていた様子がうかがわれる。

当時の寄宿舎の食費は米飯五円、麦飯四円五〇銭であった。義八は、恵二に「麦飯を食って勉強せよ」といったという。家許から小遣いがおくられてくると、学校の新田という先生が預かり無駄づかいをしないようにする仕組みであった。恵二に送金されるものは、普通の生徒の半分位であった。暫くして新田先生が仕事を斡旋してくれた。卒業生への通信用の帯封に宛名を書く仕事であった。これをして月二円貰うようになった。二年目から牧野虎次の世話で、ラーネッド邸の庭の芝刈りを中学四年までなし、中学五年には書斎と住宅の一階の清掃を担当するようになり、

この碩学がいかに規則正しい生活をしているかを知ることがようになった。

### 一高—同志社—京大—日銀—京大—(大学院) 時代

明治四一年三月、同志社普通学校を卒業した三七名<sup>(註)</sup>の卒業生のうち、つぎの六名が第一高等学校を受験した。阿部賢一、湯浅八郎、蠣崎敏雄、中江利郎、杉浦忠三郎、浅野恵二。われこそはという一騎当千のつわものたちであった。試験は七月にあったので、この間東京に出て専修学校の予備校に通って受験勉強に励んだ。試験の結果合格したのが、浅野恵二のみであった。浅野は、自分は運がよかったと述懐しているが、その努力が能力に即応した賜物というべきであろう。湯浅は米国カルフォルニヤに渡り、阿部、杉浦、蠣崎は早稲田に入った。もう一人の中江利郎は、丹波の出身で技術分野を志し、のちに千葉県の畜産試験所長となった。この間の学資は、父の友人の篤志家が支援してくれた。当時の一高では、学期ごとに成績を公表した。第一学年に入ったときは、下から一〇番目位であったが、その学年を終えるときは、上から一〇番目位であった。一年間は寄宿舎生活をなし、二年目には、ある家の書生となつて勉学をつづけていたが、兄が日露戦争で傷つき、そのあとが悪く戦病死したので、家計を助けるため一高を中退し、大阪に赴き二年ほど働いた。

向学のおもい抑え難く、同志社大学経済科(旧専念)に入学し、大正二年三月卒業し、母校同志社中学の教員を大正五年までつとめた。さらに、京都帝国大学経済学部<sup>(註)</sup>に入学し、大正九年七月一三日学士試験に合格した。卒業後、日本銀行に就職し、東京・岡山で勤務、将来を嘱目されていたが、感ずるところあつて大正一三年七月退職し、同年一〇月から昭和三年三月まで、京都帝国大学大学院に在学し本庄栄次郎教授の指導の下に日本経済史を専攻した。こ

の間、昭和二年五月から四年八月まで大阪市史編纂事務嘱託をつとめ、歴史編纂の仕事に当たっていたが、同志社の懇請により、昭和四年一月より同志社庶務部長に就任することになった。

### 同志社紛擾にあたって

ここでいう「同志社紛擾」というのは、大正六、七年の紛擾のことである。浅野恵二は、ちょうどそのころ、京都帝国大学経済学部<sup>の</sup>学生であった。彼は、学業に携わりながら母校の窮状を憂い、校友の一員として奔走している。彼が残した『穹蒼歌集』の第三編「花咲かぬ間に」(六二ページ)の中に収められている歌によって知ることが出来る。この歌集の年代は、大正七年一月一〇日から大正九年一月五日にわたっている。収録されている歌は一二六首に及び、その前後に年代ならびに簡単な説明文が記されているので、作者の立場を別にしても、当時の出来事の推移を知る点からいっても貴重な資料である。

浅野恵二は、同志社紛擾を扱った「花咲かぬ間に」という歌集に、「大正七、八年同志社革新運動征衣余塵」という副題をつけている。とくに注目すべきは「征衣」という表現である。本文中の歌の中にも反対派を称して「敵」という表現がある。それぞれが自己の立場を宗教的にも絶対化して対抗しあっている様相がみえる。

当初は事態を静観していた浅野は、大正七年一月一〇日、原田社長が留任と決まり、水崎基一、徳富猪一郎、古谷久綱、牧野虎次、近藤賢二が辞表を呈し、それにつづいて、一月一二日波多野培根中学教頭(兼中学長事務取扱)、日野真澄教授も辞表を提出するに及んで最早傍観することが出来ないとして、こううたっている。

をし、ひと  
教授 同僚を罵り学生は

師をさげすめる学びの庭はも（一月二日）

なお、このうたは読人識らずとして少壮校友団による『大正六、七年同志社紛擾顛末』の終りに記されている。

一月二五日には、少壮校友団を組織することにした。彼は少壮校友団の中心的な世話人となって労苦している。すなわち、二月九日には同僚と東上し、意見をまとめ、原田社長に三カ条の要求書を提出している。その回答がすぶる要領を得ないので、こううたっている。

幾十度ピラトの如くおのが手を洗ふも

免れ得べしやこの責任せめ（大正七年二月一日）

翌一二日、学生大会が少壮校友団に対抗することを宣言するに及んで、両者の互いの関係は決定的な対決となったことが、つぎの二首からもうかがわれる。

議事堂の瓦の数ほど悪魔害するも

をののかざりしルーテルをおもふ

砲門は既に開きぬ硝煙は

天を蔽ひぬ 勝たておくべき

ここでとられている姿勢は、決定的対決の姿勢であり、それが宗教的に正当化され、聖戦の様相を呈して来ていることである。社会や組織の複雑な変遷のなかに存する人間的矛盾を、お互いの批判の中に矯正自省しあってよりよき

道をとるといった現実的な立場の介入は許されなくなっていた。その結果、一つの小さい学校の中であって、血なまぐさい殺戮のたたかいを両者がくりひろげていった様子をうかがい知ることが出来る。

弟は師に 弟は兄にさからひて

血で血を洗ふ 末日の乱（大正七年一〇月一〇日）

宗教的集団のなかで、組織をめぐって争いがなされるとき、自己の立場を宗教的信念によって絶対化することが往々にみられるが、この場合もそのような傾向がみられる。たとえば、原田派を支持した安部清蔵宗主任が、反原田派を批判する説教をしたのに対してこううたっている。

宗主任安部清蔵氏女学校にて水崎、波多野両氏罵倒の説教を為せしに依り、予は氏を訪問して之を難詰す 一、一三

平衡バランスの取れぬ心も恥らふや

呼吸苦しげに羽織紐揺る

同年一〇月には、神戸に赴いたときの様子が記されている。

少壮中老諸校友各地に呼応して一斉に革新の灯火を挙ぐる為め、青木、古谷、三宅諸先輩に驥附し、神戸校友間を遊説す總會席と議論紛々。森田、西山、原田二郎氏等原田派弁論頗る努めたれども、母校の現状痛憤の大勢は、遂に支ふべくもあらざりき（大正七年一〇月二〇日）



我こそは正義の徒なりと自惚し

群の喧嘩は執念くもあるかな

それぞれの主義主張にはまげることの出来ない正当性があつたに違いないが、相対的人間の立場が絶対化され、相手を敵とみなし、それを排斥する戦いを聖戦とみなし、そのための苦難を十字架とみなして、それを負うことに意義を感じていた姿が浅野の歌集の随所にあらわれている。

このような極端な形にまで紛擾が対決化した理由を一概に論ずることは出来ないが、そこには積年の課題がつもつてうみを出したものと思われる。とりわけ、原田総長就任らしい、同志社大学の設置のため、大学を中心として、対外的評価や募金に力をいれてきた行き方に対して、中学を中心とする、内的・精神的教化を強調する生き方が、人間関係のもつれを含んで決定的な対決に追いやったことは不幸なことであつた。

同志社の紛擾を記した浅野の歌集のはじめは、彼が尊敬する人の教師の辞任のときにつくられたうたからはじまっている。一人は水崎基一（大正七年一月一〇日）と、もう一人は波多野培根（同年一月二日）にかかわるものであつた。前者は沈思篤実の人で、大学設立の基金募集のため各地を行脚して、誠実に尽した人であり、後者は強靱な意志と熱烈な信仰の人で、中学の教頭として献身的な働きをしていた。この二人の恩師の辞表の提出によって、それまでは比較的傍観していた浅野は紛擾に主体的に参与するようになったといつてもよい。彼はこう記している。

原田社長留任に決まるや、水崎理事は、徳富、古谷、牧野、近藤諸氏と共に即日辞表を提出して横浜へ帰省す 七、一、一〇

窮途は天にまかせて潔き<sup>いそぎ</sup>

烈士の進退仰がぬぞなき

波多野中学長、日野神学部教頭辞表を提出す 一、一二

簾かげの尺寸の地を墓場とも

日夜守り来し 献身の師を

さきへのべたように、浅野恵二は大正九年に京都帝国大学経済学部を卒業し、日本銀行に採用され、東京に勤めることになったが、東上した浅野は水崎の世話によって、浅野綜合中学校の寄宿舎に厄介になっていた。昭和六年、水崎の還暦の祝賀行事が都ホテルで行われた。子弟同人有志一〇名から醸金九百余円が集められ、中山泰輔の筆になる肖像画をおくるとともに、水崎の著書『綜合中学の実現』<sup>16</sup>を出版して頒布した。浅野は、水崎先生還暦祝賀会実行委員会代表者として、同書の「はしがき」を誌している。なお、水崎基一が昭和一二年一月二十九日に永眠したあと、『追悼』と題する文集が昭和一三年、浅野綜合中学校から出版されている(三〇〇ページ)。浅野恵二は、「同志社大学再興と水崎先生」と題して追悼文を寄せ、つぎのようなうたを詠んでいる。<sup>16</sup>

新墓ゆまかりかへりて黒梓に

かはりし御像<sup>きみ</sup>の前に額<sup>ぬか</sup>ふす

黒梓の額ゆぬけ出でねもごろに

さとし給ふらし在せし日のごと

水崎が温厚な母のような師であったとするなら、波多野は厳格な父のような存在であった。前途の生活のさしたるあてもなく、信念を貫ぬいて同志社を去っていった波多野に対して教え兒たちは醸金をする計画をすすめている。

少壮校友有志、波多野前中学長に慰勞外遊資金贈呈の計画を公表す 七、二、一六  
明日の日は野の百合ほども煩はぬ

師にいささかの 布帛料まゐらせむ

各地の校友に実状を伝え、運動を広めるため、浅野は「紛擾願末書」を執筆し、その印刷費募集のために努力している。<sup>分</sup>

大勢我徒に非なり、則ち静かに退き、己が学年試験も抛ちて、紛擾願末書を執筆し、広く之を一般校友に頒たむがため、東上有志を歴訪して、印刷費募集に努む 七、七、二九

なじらるゝも諷らるゝとも 忍びかに

黙してあらむ 時の来るまで

「花咲かぬ間に」は、二年にわたる紛擾の結末をこう記している。

滿天下校友間の大勢如何とも為し難く、流石の原田氏も我を折りて遂に辞職の已む無きに至る 八、一、一七

征戦期年、將に刀折れ矢盡きんとして、漸く我等が目的を達するを得たれども、今にして来し方を願れば、歎楽極まりて哀情うたゝ切なるを覚えずんばあらず

遂に勝ちぬ勝利の冠いだきぬ

されど佐しや靈魂たましいの母喪うしないし久遠とわの哀愁かなしみ

歌集のおわりには、大正八年一月二五日、この紛擾で同志社を去った日野真澄の家が全焼し、五人の子女を失くした悲劇をかなしむ歌（二首）と反原田派の一人として、浅野と共に各地を遊説した古谷久綱が流感によって忽然と長逝したことを惜しむ歌（二首）が記されている。そして、最後に、恩師波多野に集めた慰勞金を贈呈したときのうたで結ばれている。

少壮校友百五十餘名、前中学長波多野培根氏に、慰勞金貳千百餘円を贈呈す 八、九、一五

捧げまいる貧の一灯みそなわせ

若き門弟の この二十円

### 同志社庶務部長時代

浅野恵二は、さきへのべたように、京都帝国大学経済学部を卒業後、大正九年十月、日本銀行に入り三年間働いたのち、大正一三年七月に退社し、京都大学大学院で本庄栄治郎教授の指導の下に日本経済史を専攻し、昭和二年五月から大阪市史編纂事務に嘱託として専念していた。約二カ年間その仕事をつづけ、昭和四年一月から要請によって、同志社庶務部長に就任し、昭和一二年七月辞任するまで、約八年間、困難な時代にあつて同志社庶務部長の要職をつとめた。これよりさき昭和二年には、世界的大恐慌があり、わが国も深刻な不況を経験した。教育界においても経営

はきわめて困難な状態となった。それに加えて、同志社ではいわゆる大正デモクラシーの時代を背景として有為の人材を集めて大学の拡充をはかった海老名弾正が、失火事件の責任を負って辞任し、財政的には毎年多額の赤字があり、抜本的な建直しが必要とされていた。浅野は、本来から言えば、大阪市史の編纂に当たると共に、自分の博士論文を纏めることを念願としていたが、母校の切なるねがいをうけいれて庶務部長に就任した。「同志社の再建をするのがわたしの学位論文である」というのが浅野の就任の抱負であった。浅野は当時四一歳であり、京大、日銀などでの豊かな経験を経た最も働きざかりの八年間を、困難な状況の中にあつた同志社のために尽力をなした。

浅野は、海老名弾正のあと総長となつた大工原銀太郎総長の下に、庶務部長として、同志社の再建にあつた。彼がとりわけ強調して実行したことはつぎのような点であつた。

(一) 制度的責任体制の確立

従来から同志社では、制度組織が明確でない上に、規則もはっきりしていない点もあつたので、同志社の令規集を制定する作業をすると共に、三部制を定めて責任体制を確立するようにつとめた。すなわち、教育部、財務部、庶務部の三部を設け、教育部は総長が担当し、財務部を島本徳三郎がつとめ、浅野が庶務部の責任者をつとめた。大工原は「統して治せず」という英国の議會制における女王の地位を引用して、学内のことに深く関与しないようにしていた。毎週一回昼食を共にしながら、三部の責任者が鼎談をし連絡をとるようした。大工原は、いつも黙って意見をきいていることが多かった。大工原は千里山から通つて来てあまり長く学校にいなかつた関係から、のちには教育部長代行を浅野がするようになった。これは、当時理事として教育部の委員をしていた三宅驥一のすすめによるものであつた。今日の例規集や理事会内における担当理事の分担などは、おおむねこ

のときものを継承しているといえる。

### (二) 感謝と表彰

海老名の去ったあと、中島重などの有力教授が同志社を去り、同志社人の中には動揺があった。そこで人心の一新をはかる必要を感じ、同志社に功労のあった人びとを表彰し感謝の意を表わすことにした。第一に、長年理事として尽力したのみでなく、総長事務取扱をたびたび勤めた中村栄助の古稀の祝会を開き、多年の功労を感謝するときをもった。第二に、アメリカン・ボードの宣教師として多年同志社の教育、とくに女子教育に貢献したM・F・デントンの叙勲を申請し、昭和八年勲六等瑞宝章をもらうようになった。従来から同志社は人づかいが荒くて、感謝するところが少いという批判をうけて、永年功労者の表彰規則を設け、一〇年以上、二五年以上勤続者の表彰を行うようにした。さらに、神学館（現クラーク記念館）の二階を修理して、同志社の功労者の肖像画を並べて記念するようにした。

### (三) 岩倉への進出

当時、今出川の狭いキャンパスには七つの学校がひしめいていた。地理的にも発展の余地がない上に、いずれの学校も赤字であった。そこで相国寺から御所にかけての航空写真をとってみると、これ以上現在のキャンパスには進展しないことが明白となった。そこから考えられたのが岩倉への進出であった。もちろん、その実現のためには多くの人びとの協力が必要であり、一人の人の推進によるものではなかった。しかし、浅野もその一役を背負ったことは事実であった。

このころ浅野は、大工原総長が亡くなり学友湯浅八郎が昭和一〇年第十代総長に就任し、就任式を挙行了た際、そ

の式辞を編集し出版している。

浅野は、昭和一二（一九三七）年、八年間尽力した同志社庶務部長の職を辞した。おしよせる軍国主義の流れの中で、同志社では、いわゆる「神棚事件」（一九三五年）や「チャペル籠城事件」（一九三七年）がおこり、大工原総長のあとを受けついで一九三五年に就任して間もない湯浅八郎総長をはじめ、同志社当局にとっては受難の日々であった。浅野は新島の遺志をうけついで、キリスト教主義学園同志社の伝統を守ることに懸命であったが、配属将校との対立が尾をひいて、彼はついに同志社を去るに至った。比較的温容な気分の強い同志社人にとっては、財政再建を旗印に乗り込んだ浅野は敵しい番頭役として敬遠されていた。軍国主義の風潮が強い外部からは、キリスト教主義学校同志社の防衛者として排斥されていた。いずれにしても、彼は苦しい二つの十字架の板ばさみになって同志社を去っていった。

浅野恵二は晩年、夫人の郷里近くの浜松のエデンの園に居を定め、和歌を作って余生をたのしんでいた。昭和五二年の夏の作に、

故郷の潮の香徳べと初盆の

霊にも分つ丑の日鰻を

というのがあった。これはNHK静岡放送局の「県民文芸」の短歌の佳作に入選し、同年九月一三日に放送された。同志社の百周年にあたっては、いくつかの夢にみた提言をなすなどして、思いを母校の未来にはせていたが、昭和五三（一九七八）年に永眠した。ときに九〇歳であった。

## むすびにかえて

浅野恵二は、倉敷の敬虔な信徒・浅野義八の信仰をうけつぎ、菓子商としての家業を助け、苦学力行の人であった。明治四一年、同志社普通学校を卒業して、第一高等学校の入学試験をうけた六人のつわものたちの中、唯一人浅野恵二が難関を突破したのも、彼の努力のためものというべきであろう。そのうち、京都大学で経済学を学び、日本銀行に就職し、世にいう出世コースを歩むかに見えたが、感ずるところあって、退職し、京都大学大学院において日本経済史の領域で研究に励んでいたが、母校同志社からの切なる招きにこたえて、昭和四年から一二年まで庶務部長の要職をつとめた。当時の同志社は、昭和のはじめの世界的恐慌の影響をうけて、財政的に危機にひんした同志社再建のために尽力するとともに、制度組織を整え、就業規則を定め、功労者表彰を行なうなど困難な状況下における同志社のために尽した。比較的微温な雰囲気と自由な伝統の中で過してきた同志社人からは、規則制度を整え、冗費を省いて再建をはかるうとした浅野は、うるさい番頭として敬遠され勝ちであった。やがて軍国主義の傾向が強くなり、配属将校と意見を異にして、同志社を去るに至った。

『同志社九十年小史』においては、浅野恵二においてはなんらふれていなかった。『同志社百年史』においては、四カ所にわたってふれられているが、それらは、校友会、同志社中学、庶務部長時代に関するものである。恵二の残した六冊の歌集から辿ると、彼は大正六、七年の同志社紛擾における「少壮校友団」の中心的世話人であり、『大正六、七年同志社紛擾顛末』の筆者であったことも明白である。やや硬直した嫌いもあるが、母校をおもう真情に立って、真実を見きわめようとした彼の誠意は、六〇年を経た今日において漸く理解されるに至ったということが出来よう。



付記

本稿で用いた資料のうち、浅野恵二については、主として彼の自筆の歌集（全六編）と『回想談テープ』（七巻）がある。その内容の概要は左の通りである。

歌集『穹蒼歌集』

- 第一編「花輪に編みて」（明治四一年―四四年）洛北相国寺畔にて、一三九頁、三三三章、三三八首
- 第二編「見かへり勝ちに」（明治四四年冬―大正五年夏）洛北相国寺畔にて、一〇八頁、二八章、二六五首
- 第三編「花咲かぬ間に――同志社革新運動征衣余塵」（大正七年―八年）京大青年会にて、六二頁、一二六首
- 第四編「無産の富」（大正八年春―冬）洛東吉田町にて、一四四頁、八四章、五三四首
- 第五編「我が生の断層面」（大正九年春―秋）鴨東吉田町にて、一〇六頁、四〇章、三七七首
- 第六編「新しき道へ」（大正九年秋―一一年春）京浜当地にて、九一頁、四二章、三六三首

合計 六編、六五〇頁、二〇〇三首

回顧談テープ（聞き手西田進牧師、エデンの園にて）

一卷 A 倉敷の家庭と教会

B ナシ

- 二卷 A 阿部賢一とその姉のこと、倉敷教会のこと  
 B 倉敷を出て
- 三卷 A 同志社普通学校時代、教師、職員の想い出  
 B 同志社普通学校を卒業し第一高等学校に入学
- 四卷 A 一高退学、大阪で働く、京大入学、日銀勤務後再び京大大学院に学ぶ  
 B 同志社庶務部長時代
- 五卷 A 同志社庶務部長時代  
 B ナシ
- 六卷 A 百周年を迎える同志社に対する希望  
 B ナシ
- 七卷 A 百周年記念アルバムを見て  
 B 同志社函館高校の夢

注

- (1) 『山川均自伝、ある凡人の記録、その他』岩波書店、昭和三六年、九ページ。
- (2) 原繁太郎『小学岡山県誌 全』明治三七年、一七ページ。
- (3) 大原総一郎『大原敬堂千話』昭和三八年一〇月一〇日〜二二日毎日新聞に掲載、のちに毎日新聞編『十人百話』(一九六四年、一二四ページ)にまとめられた。

- (4) 『山川均自伝』一八ページ。
- (5) 『倉敷基督教会略史』(以下『略史』)昭和一〇年、四〇ページ。
- (6) 『略史』附録、一二〇―二三ページ、二四ページ。なお太田兼については、拙著『倉敷の文化とキリスト教』(日本基督教団出版局、一九七九年)一五九ページ以下参照。
- (7) 『略史』附録、一二ページ。
- (8) 『略史』附録、二四―二五ページ。
- (9) 『略史』、二八ページ。
- (10) 浅野恵二、回顧談テープ第一巻A。同テープは静岡県聖職保護園にて、一九七六年、西田進牧師により録音されたもので、全部で七巻ある。同上テープより。
- (11) 『同志社百年史』、五二七ページ。
- (12) 『同志社百年史』、七五七ページ。
- (13) 『同志社百年史』、五八八ページ。
- (14) 『同志社百年史』、五八八ページ。
- (15) 水崎基一、『綜合中学校の実現』昭和六年、平野書店、八三ページ。
- (16) 石田吉貞編『故水崎基一先生 追悼』昭和一三年、浅野綜合中学校、八四―九〇ページ。
- (17) 同書は高原丈夫編『大正六、七年同志社紛擾顛末』(大正七年八月二七日発行、本文八六ページ、附録八四ページ)として、四、〇〇〇部(実費三〇銭)出版され広く配布されている。
- (18) 浅野恵二編『同志社第十代総長就任式々辞』昭和十年、一八ページ。